

# 対魔導学園35試験小隊

1. 英雄召喚

柳実冬貴

---



ファンタジア文庫

1906

## Chapter

プロローグ	5
第一章 問題児、集う	8
第二章 出撃! 雑魚小隊!	53
第三章 不器用な人たち	104
第四章 英雄召喚	189
最終章 黄昏時に、魔女狩りを	273
エピローグ	302
あとがき	309

口絵・本文イラスト  
切符

## プロローグ

季節は春。対魔導学園中等部の二年生になった草薙タケルは、初日から氷結していた。生徒達は座学を受けるものだとはかり思っていたのだが、いきなりアサルトライフルを一丁持たせられた挙げ句、「今からちよつと皆さんに殺し合いのようなものをしてもらいます」と告げられ、お互いペイント弾を用いて殺し合いごっこをするはめになった。

最初の授業、クラスメイト同士でのチームデスマッチ。  
二〇対二〇。開始時の人数は総勢四〇名。

長期戦になるかと思われたその殺し合いごっこは、わずか三〇分で終わりを迎えた。

「……………」  
仰向けに倒れた草薙タケルは、額に押しつけられた冷たい銃口の感触に、ただただ驚愕するしかなかった。

開始直後、ライフルを使用せず、樹脂製の銃剣のみを手にデスマッチに臨んだタケルを、クラスメイト達は奇異な眼差しで見ている。

しかし、タケルには剣で充分だった。剣だけがタケルの取り得だった。戦闘慣れしていない他の生徒とは違い、闇に紛れて剣で相手を仕留めるやり方を、幼い頃からたたき込まれていたから——だから、タケルには自信があった。

『俺は負けねえ。お前ら全員倒して剣術がすげえってことを世に知らしめてやる！』  
事実、タケルは最後の最後まで負けなかった。

『誰にも負けねえ！ 銃だろうが魔法だろうがなんだってぶった斬ってやる！』  
初めから自信があった。

『お前が最後か……女だろうが、俺は容赦しねえぞッ！』

銃剣一本でも、この場にいる誰にも負けないという自信が。

「……俺、負けたのか……？」

視線を上げると、信じられないのを見た。

目を疑うような光景。闇の中であつてもなお輝く、夕焼け色の髪とコバルトブルーの瞳。まるで神話に出てくる戦乙女をそのまま具現化したかのような、美しい少女がタケルを見下ろしていた。

負けたことの悔しさも、自分が学園に入学した動機も、なにかも吹き飛んだ。  
言葉にならない完璧な美しさで強さが、そこにあつたのだ。

少女は銃口を突きつけたまま、真っ直ぐにタケルを見下ろしている。

「私の勝ちだ」

この瞬間、『異端審問会のトップになって世界を変える』というタケルの目標はもうくも崩れ去った。

中等部時代。

およそ二年前の出来事である。

魔法が弾圧されるようになってから数百年。

『魔女狩り戦争』と呼ばれる魔女対人類の壮絶な戦いが終結した時、人類はその数を一〇分の一にまで減らしていた。

人類は一五〇年をかけて社会を再建。世界は急速な科学技術の発展を見せ、インターネットや携帯電話の普及によりさらなる経済成長の片鱗を見せ始めている。

魔法は管理され、幻想生物などはほぼ絶滅し、体内で魔力を生成できる人間もごくわずかとなった時代。

武力の頂点の座も、とつくの昔に剣から魔法、そして銃に移り変わっていた。

## 第一章 問題児、集う

異端審問官育成機関。

通称、『対魔導学園』

魔女や魔法使い、魔導遺産に対する畏怖、差別意識が本格化し始めた時代。

国はそれら【魔導】に関わる全ての脅威を取り締まるため、異端審問会を発足。

これに反旗を翻したのが、魔力を有する人間、すなわち魔女であった。

この動乱は後に『魔女狩り戦争』と呼ばれ、人類の大半を死滅させた忌むべき戦いとして人々の脳裏に焼き付いている。

魔女狩り戦争終結後、異端審問会の活動はさらに本格化。魔女への処罰は法として完全に確立され、異端審問官の育成機関である対魔導学園を創設。

異端審問会の権力は不動のものとなっていた。

「……クビ、ですか？」

対魔導学園理事長室にて、夕焼け色の髪をした少女は不服そうに眉をひそめた。

「そ。正確には資格の剝奪、かな。再取得は可能だからクビってわけでもない。君は今日から異端審問官ではなく、対魔導学園の一生徒ってことになるわけだ」

対魔導学園理事長兼、異端審問会会長、鳳 颯月は薄い笑みをたたえながら言った。女性なのか男性なのか判断のつかない容貌をした彼の仕草には、独特な威圧感と色気がある。

「どうしてこういう処分に至ったのか……わかるよね？」

「……………」

少女は心当たりがあるのか、押し黙った。颯月は年季の入った豪華なデスクに置かれた紅茶を口にしながら、椅子の背もたれに体重を預ける。

「先日の失態、忘れたとは言わせないよ。下手をすれば審問会にとって致命的な問題になりかねなかったんだ。やり直せるチャンスが与えられただけ幸運と思うんだね」

「……………」

「君は異端審問官『魔女狩り』としての使命を放棄した。これはその罰だよ」

颯月は両手を上げて言った。

異端審問官にも、それぞれに役割が決まっている。

各種抗魔兵器を開発、整備する「鍛冶師」  
 情報収集、潜入工作を担当する「隠密」  
 医療関連全般、魔法傷害の治療を担う「薬師」  
 強襲、突入、及び審問会に関わる設備の防衛を行う「騎士団」

そして独自に捜査、任意で戦闘を行うことが認められている「魔女狩り」

これらの様々な職種がある通り、異端審問官の仕事は魔女を狩ることだけではない。魔法導に関わる全てのことを解決するのが仕事だ。

魔女狩り戦争から一五〇年。魔法を駆使して活動する魔女や魔法使いと呼ばれる代物はさほど多くないのが現状だ。世界に残った魔女と呼ばれる人々は法律で子孫を残すことが許されないため、突然変異以外で魔力を持つ人間が生まれることはほとんど無い。

しかし、魔女以外にも脅威は存在する。

魔力を宿した物質、『魔法導遺産』が、その一つだ。

魔法導遺産の種類は様々で、剣、書物、銃、壺や陶器などの骨董品、さらには絵筆や木の葉、煙草の吸い殻などという代物まで存在する。無機物に魔力が宿ることは現代でも珍しくはなく、ごく希にだがとてもない兵器になり得る物が出現することもある。

古くから存在が確認されており、伝説や伝承に残っている魔法導遺産をロスタタイプ、現

代に出現する魔力を帯びた物質をイレギュラータイプと呼称。兵器としての価値だけでなく、歴史的価値の高い物も多く、コレクターも存在するため、裏組織によって高値で売買されることも少なくない。

他にもカルト集団や邪神崇拜などを行う魔力を持たない崇拜者達の逮捕や、人為的なものでない超自然的な不可視災害の対処、幻想生物の保護と研究などなど、仕事の幅は実に広い。

「ま、卒業まで我慢しろって言っているわけじゃないし、そう重く考えなくてもいいけどね。君に反省の色が見えるようになったら、その時はまた元の地位に戻してあげてもいいという考えだ。これに懲りたら、もうこの前のような間違った行動は——」

「お言葉ですが、先日の件に関して私は何も間違ったことをしたとは思っていません」  
 黙っていた少女が、口を開くなり颯月の言葉を遮った。

会長に向かって、審問官に過ぎない彼女がこのような口をきくのは本来ならば言語道断のはず。颯月は気にした風もなく、デスクに肘をつき、手に顎を乗せて口元だけで笑ってみせた。

「桜花、一つ質問をするよ。異端審問官の使命とはなんだい？」

颯月の問いに、桜花と呼ばれた少女は目を鋭く細めた。

「人々を魔法の脅威から守り、魔女や魔法使いを駆逐すること」  
 「駆逐ねえ。そんなだから君は仲間内で《紅蓮姫》なんて不名誉なあだ名をつけられてしまっただよ」

「……………」

「異端審問官、ひいては我々審問会の果たさなければならぬ使命。それは魔女の逮捕、及び魔導遺産を押収することだ。殺したり破壊することが目的じゃないんだよ」

「……そんなことは、わかっているつもりです」

「無闇に殺して撲滅を目指す時代はもう終わったんだ。そんなやり方では冤罪も蔓延る。

魔女といえど悪人ばかりではない。なりたくてなったわけじゃない人達が大勢いる。そういう人のためにも、我々は魔女を保護しなければならぬ」

桜花は拳を握りしめ、颯月の綺麗事に、湧き出た怒りをぐっと堪えていた。

「旧日本のことわざで餅は餅屋つてのがあるよね。異端審問官に魔女を殺すという役職は一つも無いんだよ」

「……言いたいことはわかります。自分の欠点も自覚しているつもりです。ですが、あの時は魔女を殺す以外に方法はありませんでした。それとも、人質にされた子供を見捨ててまで、魔女の逮捕を優先すべきだったとでも？」

「人質がありながら銃弾で額に風穴を開ける行為は、人命を優先した行動かな？ 人質が殺されてしまう可能性は考慮しなかったのかい？」

「私にそんな可能性はありません」

言い切った桜花の瞳には、自信と確信が宿っていた。

颯月はため息をついた。

「……とにかく、君はこれから学生をやり直すんだ。もう手続きは済んでいる。今日から、勉学に励むようにね」

颯月は返答を待たずしてデスクの引き出しを開けて、中から書類を取り出した。

「おとなしく処罰を受けて、また戻ってきなさい。君の実力ならすぐだから」

「……ですが、私は例の死体収集家の捜査の途中で……取引相手の手がかりだっってもう少しで掴めそうなんです。お願いです、せめてもう少しだけ——」

「前にも言ったけど、あの事案は警察の管轄だということで、審問会と警察本部の間で合意が為された」

「しかし、いつ生きた人間に犠牲者が出るかわかりません……警察の手ぬるい捜査では」

「魔術的な痕跡が見つからなかった以上、審問会は手出しできないのは君も知っているだろう」

「……っ」

「だいたい、君はもう審問官じゃないんだ。もう捜査に口出しする権利は無いよ」

桜花は、あからさまに悔しそうな顔をした。

「ずっとそんな不機嫌な顔をしていると美人が台無しだよ？ いい機会だと思いなさい。君はもう少し、コミュニケーション能力を磨くべきだと前から思っていたんだ。魔女狩り達の間でも、君の評判はすこぶる悪い。無愛想で言うこと聞かないって」

「……それはどうしようもありません。性格ですから」

「ほら、そういうところが問題なんだよ。私も君を一三歳で審問官にしてしまったことは早計だと思っていたんだよね……人間としての成長を学園で取得してきたまえよ」

颯月は心底呆れたようにため息をついて、桜花の方へ書類を投げた。

桜花はデスクに散らばった書類をまとめて、やはり不機嫌そうに目を通す。

「……これは？」

「小隊名簿さ。君がいたのは中等部までだけど、高等部から必修となる学園試験小隊制度は、知ってるよね」

「はあ、まあ」

「君は第三五試験小隊に所属することになった。通称雑魚小隊なんて呼ばれてる」

「……………雑魚？」

すごくわかりやすい通称に、桜花はぼかんとした。

その反応を見て、颯月はこれまた嬉しそうに笑う。

「変わり者揃いでね、私のお気に入りの小隊なのさ」

「何故、私がそんな小隊に配属されなければならないのですか？」

「だって、ほら、ね？」

颯月は唐突に桜花を指さして、ニッコリと微笑む。

「変わり者」

「……っ！」

「はいはい怒らない怒らない。君には普段から激情家な一面があるんだもんなあ。そこらへんも直せたらいいねえ、学園生活でさ」

「配属の変更を希望します。理想的なのは私一人だけの隊です。その方が他人に迷惑がかららないし、私にとっても都合です」

「それじゃ意味ないでしょー。それにもう決まっちゃったことは変えられません。メンバーの変更は絶対に認められないって、校則にあるからね」

ニシシと意地悪に笑う颯月。桜花は遺憾に思わざるを得ない。



「ま、そう悲観することもないよ。連携は取れていないが、個々の能力は突出しているところがあるからね。何よりこの小隊の中には一人、レリックイーターの候補者がいるんだ」  
レリックイーター。その単語に、桜花は驚いて目を見開いた。

「ば、馬鹿な……こんな連中の中に、アレの候補者がいると言うのですか!？」

「うん。シリーズの最後の一つ……黄昏仕様は魔女狩り戦争以後、誰も所有者が決まっていなかったからね」

「ありえません！ 何故学生から選ばれるのです!？ レリックイーターは魔女狩りだけが使用を許されているはずですよ！」

「それを言ったら君だって特例だったんだよ。一三歳で魔女狩りになって、すぐに《ヴラド》の契約者選ばれたんだからね」

「それはそうですが……！ よりよって黄昏仕様のレリックイーターなんて」

「残念だけど君ほどの腕があっても、あれにはフラれたしね。他の魔女狩りも全員試してみたが、アレが首を縦に振ることはなかった。となれば、もう学生から候補者を選ばせるしかないじゃないか。それとも君は一般人の中から選出しろともいうのかい？」

颯月の意見に、桜花は下を向く。

レリックイーターとは、異端審問官「魔女狩り」のみが限定的に使用を許された兵器で

ある。ただし兵器と言っても、現代に用いられる抗魔作用のあるミスリル鉱やアダマンチウムを素材に用いた抗魔銃器とは全く異なる代物で、魔女狩り以外の人間が使えば法に触れてしまう。

レリックイーターとは、紛れもなく魔導遺産なのだ。

魔力によって生まれた産物であり、人類にとつて忌むべきモノなのである。

レリックイーターシリーズはその全てが銃を素体としている。どういう経緯で産まれたのかは極秘とされており真相は明かされていないが、そのどれもが強力な魔導遺産として嚴重に扱われている。

毒をもって毒を制す。魔導を滅しようとする者にとつての最大の禁じ手。

異端審問会は畏怖と自戒の意を込め、この魔導遺産達に歴史上に存在する暴君、魔王の名をつけている。

「もちろんこちらとしても本意ではないんだ。我々が候補者を選ぶんじゃない。レリックイーターが契約者を選ぶ。君も通った道だし……わかるよね？」

「……はい」

言い聞かせるような颯月の言葉に、桜花は短く返事をした。

いまだに腑に落ちない気持ちを抱きながらも、手に取った書類をめくり、候補者達の顔

写真を確認していく。

「念のために聞きますが、この三人の内、一人が候補者なんですよね？」

「ああ」

「どの生徒ですか？」

「うん……それはね……」

桜花が聞くと、颯月は神妙な顔つきをして顎に手を当て、キッと鋭い視線を向けた。

「おしえてあげません」

……………

……………

桜花が無言で踵を返し、肩を怒らせながら理事長室を後にしようとする。

「ふはは！ 部外秘だからね教えてあげられないんだヨ！」

「あなたに真面目に聞いた私がバカでした……！」

「あー待って待って、も一つ報告ね。君の《ヴラド》は学生やっている間は使用できないことになったから、そこんとよろしくー。緊急時でも使ったら怒るからねー」

「わかっていきますよそんなこと！」

バン！ と扉を開けて、桜花が去っていく。

颯月は彼女の背中を見送りながら、しばらく楽しそうに笑っていた。

「やれやれ、年頃ってのは難しいね……」

椅子に背を深く預けて、肘掛に頬杖をつく。

「……おや？」

ふと颯月が部屋の隅を見やると、得体の知れない影が鎮座していた。

「ラピス、いつからそこに？」

「……………」

「ダメじゃないか、まだ君は契約者がいないんだ。無駄に魔力を生成してはいけないよ。一人歩きは御法度だって言っただろう？」

颯月の呼びかけに答えるように、薄闇の中で影が蠢いた。まるで闇そのものように思われたソレは、人の形を成し、影の中から静かに姿を現す。

現れたのは、服装から髪色、瞳の色までもが瑠璃色に染められた少女だった。肌の色は病的なほど白く、人間のそれとは比較にならないほどにしなやかだ。

少女は、まばたきも、息も、鼓動すら響かせずに、ただ無表情にその場に佇んでいた。

「君の維持も大変なんだ、まだ契約を実行しないのかい？」

「……………」

「まだ迷っているのか……それとも」

少女は颯月の問いに答えない。

息すらせずに、佇む。

それでも瞳だけは深淵のように暗い闇を内包して、颯月を見ていた。

颯月は物言わぬ少女から何かを感じ取ったのか、目を細めた。

まるで、童話に出てくるチェシャ猫のような笑みを浮かべて。

「……そうか。考えておくれよ」

「……………」

「宿り木の名に恥じないやり方だ……末恐ろしい子だよ、お前は」

颯月はそう言って眠るように目を閉じると、喉を鳴らして不気味に笑った。

少女の表情は動かない。

ただ微かに、瑠璃色の蛍のような光が、少女の周りを浮遊していた。

\*\*\*

草薙タケルは剣術以外が絶望的だった。

苦手というわけでもなく、ダメというわけでもなく、絶望的なのだ。

彼が生まれた草薙家という家系は、現代から約三〇〇年前までは、有名な戦争屋の家系だった。剣が全ての兵器の頂点にあった時代、草薙家は数々の戦場にその名を轟かせていた。

剣術ならば唯一無二。天下無双の草薙流。戦場で草薙の者を見たら無条件で白旗を上げると言われるまでに、草薙流は恐れられていた。

でも、そんなものは遥か昔のお話。

現代において剣術などというものは、武芸の道でしか役に立たない。

現実には、ペンは剣よりも強し。銃はペンよりも強し。

つまり当然のごとく、銃は剣よりも強しなのだ。

剣は底辺。時代遅れの鉄屑だ。

「おい。あれ、雑魚小隊の剣術バカだろ」

学園の廊下を歩くタケルを指さして、壁際でバックジューズに口をつける男子生徒二人組が嫌みたっぷらしい笑みを浮かべた。

「ああ、この前の訓練で樹脂ナイフ持って突っ込んできたバカか」

「銃使わずに突撃とか何の冗談だよ。それに見ろよ、あの腰に下げてるの。あれって真剣だろ?」

生徒の言うとおり、タケルの腰には鞘と共に刀がぶら下がっていた。

切れ長な三白眼、一文字に結ばれた口、漆黒と呼ぶに相応しい色をした少し長めな前髪。まさに強面な武士と呼ぶに相応しい容姿をしている。

おまけに刀が制服のベルトに当たってカチャカチャと音が鳴るので、歩くだけで余計に目立っていた。

「日本刀だよな。大戦よりもっと前の主力兵器だ」

「あの二、三人斬ったらダメになるっていう使い道のわかんねー剣か?　なんでそんなもぶら下げてんだ。バカなのか?」

「バカなんだろう。だから雑魚小隊なんか配属されるんだ」

嘲笑が廊下に響き渡る。

ケタケタという耳障りな笑い声を背中に投げられながらも、タケルは背を真っ直ぐに伸ばして足を進めた。

後ろ姿は凜々しい。

だが、前は、鬼の形相一步手前だった。

元々の目つきの悪さが際だって、まるで殺人鬼が何かのように顔が怒り狂っている。周りの生徒も、あまりのタケルの恐ろしさに道を譲って壁際に避けていた。

「——!?　はッ……!?」

タケルは周りの状況に気づき、鬼の形相を引つ込める。

「いかんいかん。……我慢……我慢だ……草薙タケル……!　剣を馬鹿にされたくらいでいちいち怒ってなんかいられるか……!」

しかめっ面で一人ごちて、はあと深くため息をつく。

「俺はもう、昔の俺とは違うんだ」

腰に下げた刀に手を当てる。草薙タケルになじむものはこれしかない。草薙タケルに残された道は、必然的にこれしか残っていないかった。

幼少の頃から勉学は底辺の底辺。手先も器用かと言われれば、不器用以外の何者でもない。文才も無ければ、絵の才も無いし、運動神経は優れているがスポーツにおいてのセンスや勘もマイナスを地で行っている。

何よりも絶望的と呼ぶに相応しい技能は、銃の射撃能力だ。

その才覚の無さは『呪い』と呼ぶに相応しい代物だった。狙った物に弾が当たらない、というレベルの話ではない。現実、弾が的を避けるのだ。銃口が真っ直ぐに向いていよう

と、至近距離であろうと、タケルの放った銃弾は的にかすりもしない。零距离ならばと引き金を絞ったとしても、何の運命のいたずらなのか、必ず銃が誤作動を起こして不発、最悪爆発という結果が待っている。

故に、草薙タケルには、剣の才能しか残されていなかった。剣だけならば、およそ現代で彼の右に出るものはいないと言い切れるほどに凄腕だが、そんなものがこのご時世にいたい何の役に立つというのか。

タケルは高ぶった怒りを抑え込み、自分の刀から手を離れた。

「仕方ない……無能と罵られようが、俺にはこれしか無いんだ」

無能だったら、何もハイレベルな対魔導学園に入って、さらにハイレベルな異端審問官を目指さなくてもいいではないか。タケル自身、そう思わなくもない。

しかし、彼がこの職業を目指すのには、とてもとても切実な理由があった。

(金だ)

異端審問官はとても給料がいいのだ。

(家に代々残された借金……その上両親もすでにこの世にいない……それから何より最愛の妹のためにも、他の職では給料が全然足りないのだ！)

ぐっと拳を握り窓の外の空を見る。タケルの瞳に涙は流れておらずとも、何か切実な輝

きを放っていた。

(ご先祖様お許しください……生きていくにはお金が必要なのです)

今はただ、金を稼ぐ。

二年前とは違い、今のタケルの望みはそれだけだった。

異端審問官になるためには、対魔導学園に入学すればいいというものではない。学園への入学は必要不可欠だが、中等部から高等部への進級試験があり、さらに高等部在学中に厳しいノルマをこなしてポイントを稼ぐことで、ようやく異端審問官になることができるのだ。

そのノルマというのが、一番の問題だった。

「……むう」

タケルは目の前の部屋のドアに対して、気落ちした顔で腹部を押さえた。

ドアのプレートには、「一学年第三五試験小隊」と記されている。

タケルは胃の痛みを感じながら、ドアをノックする。

「入っていいわよ」

ドアの向こうから、そっけない声。

「あ、ちょっとまー」

続いて何やら焦ったような黄色い声が聞こえたのだが、タケルは止まることができずにドアを開けてしまった。

開けた瞬間、意味がわからなくなった。

「……………」

「……………」

目の前に、何故かバニーガールがいた。

しかも着替えの途中らしく、身長わりに大きな白い二つの膨らみが、見えてはいけない部分がギリギリで見えていない状態で晒されている。胸もさることながら、なんとも扇情的な太ももと、無機物のはずなのにぴくんと動く兔耳から妙に目が離せない。

何故学園にバニーガールがいるのか。本来もつと硬派な学園ではなかったか。俺は夢でも見ているのか。

そんな疑問すら、タケルには浮かばない。

タケルは特に疑問に思うこともなく全てを理解し、泣きそうな顔になって部屋の壁際を見やる。



そこには口に空気を溜めて「プププ」と笑いを堪えている白衣を着た少女がいた。タケルは一瞬でこの状況を理解した。

ああ、またか……と。

「き、き……っ」

バニーガールの顔が真っ赤に染まり、今にも悲鳴を上げようとしていた。

表情からは次に出てくる言葉が「キヤー」であることは、お約束的に考えて予想できる。ところがそんな状況で、何故かタケルの方がぼろりと涙を流した。

「……ってなんであなたが泣くんですか!？」

バニーガールは、予想外のタケルの反応に、思わず跳び蹴りを入れてしまった。

みぞおちにもろに蹴りの決まったタケルは、ドアを吹っ飛ばして再び廊下へ。

よだれを垂らしながらピクピクしていると、バニーガールの少女がずかずかとやってきてタケルの胸ぐらを掴んだ。

「どういうことなんです!? 何故あなたがわたくしのバニーガール姿を見て泣きやがりますか!? 普通に考えて、ノーマルに考えて泣くべきはわたくしの方でしょう!？」

「……いや……」

「そんなにわたくしの姿が悲しいことになっていたと!? そんなに滑稽だったと!? 泣く

ほどに!? い、今のわたくしにはそんなに魅力が無いとおっしゃるのですか!？」

「……ちげ……っ、お前は充分にいい身体して——」

「っっっっ!? 変態! 変態変態!」

きゅーっと首を絞められて、タケルの顔はさらに青くなる。少女はと言えば涙目になりながらうーうー唸っている。

理由も口にできずに泡を吹き始めていると、奥にいる白衣の少女が笑いながらその様を見つつ、デジカメのシャッターを高速で切っていた。

「まさか泣き出すとは予想外だったわね。あはは、いい絵が撮れたわ」

「またお前の作業か……! うさぎで遊ぶのはやめるといつも言ってるだ——うぐえっ」

「だあって、こいつババ抜き弱いんだもん。罰ゲームよ罰ゲーム。名前もうさぎだしおっぱいおっきいし、バニーガール似合ってるじゃない?」

「お前のコスプレ趣味に巻き込まれる俺の身にも……なれっ」

「もしかしてわざと巻き込まれてるのね? あはは、この変態。変態小僧」

あんまりにも無邪気にバカにしてくるものだから、タケルは怒る気にもなれない。白衣の少女はデジカメの画像をにんまりと観覧している。

「どうしようかしらねえ。構内にはらまこうかしらねえ。うふ、うふふ、バニーガールとそれを見て涙する男の凶。我ながら意味がわからなくてそそるわあうふふふ」

不吉な算段を行っている白衣女に、「やめなさいーい！」と飛びかかる半裸の少女。

騒がしい部屋を他所に、タケルは廊下で涙を流す。

彼らがタケルの所属する第三五試験小隊、通称『雑魚小隊』のメンバーだった。

同時に、彼らこそがタケルの胃痛の原因だったりする。

草薙タケルは、雑魚小隊の隊長なのだ。

この続きは5月19日発売のファンタジア文庫で！

© Touki Yanagimi, Kippu